

# 愛媛大学医学部 同窓会会報

2023 September No.39

発行日／令和5年9月1日  
編集発行人／薬師神 芳洋  
発行／愛媛大学医学部同窓会  
〒791-0295  
愛媛県東温市志津川  
TEL(089)960-5989  
印刷／太陽印刷株式会社  
TEL(089)932-2881



## 表紙紹介

1984年3月「6期生卒業写真」

## CONTENTS

学部長挨拶	2
卒業生からのメッセージ	3
新任教授からのメッセージ	4
役員一覧	5
退職教授からのメッセージ	6
医学祭を終えて	7
活躍する卒業生	8
医学科学力向上推進委員長から	9
50周年に向けて、6期生雄志座談会	10
恩師をおたずねします	16
同期会報告	17
支部紹介	18
愛媛大学医学部同窓会会則 細則 申し合わせ事項	19
医学部課外活動(運動部)紹介	21
第39回総会報告	22
あとがき	23
お知らせ	24



### 愛媛大学医学部創立50周年にあたって

羽藤 直人 (平成元年卒、11期生)

愛媛大学大学院医学系研究科長・愛媛大学医学部長  
愛媛大学医学部創立50周年記念事業 実行責任者  
愛媛大学医学部同窓会 副会長

愛媛大学医学部は、本年9月29日に創立50周年の大きな節目を迎えます。本同窓会会報は例年より早く、創立記念日頃にお届けできるよう準備をいたしました。愛媛大学医学部長として、また愛媛大学医学部50周年記念事業の実行責任者として、愛媛大学医学部同窓会の会員各位とこれまで支えてくださった皆様に、心より御礼申し上げます。

激動と混乱の50年を乗り越え、愛媛大学医学部は大きく発展しております。創立時は医学科8講座で発足した後、着実な充実を図り、現在では医学科61講座(臨床系24講座、基礎系16講座、戦略型寄附5講座、提案型寄附14講座、産学協働2講座)、看護学科2講座を有する、全国的にも有数の医学部として発展してきました。1976年には附属病院が開設され、1979年には大学院医学研究科、1994年には看護学科、1998年には看護学専攻が設置されております。創立以来の基本理念である「患者から学び、患者に還元する教育・研究・医療」のもと、これまで医学科4,521名、看護学科1,776名、医学専攻998名、看護学専攻273名の優れた医療人を輩出してしております。また、価値ある研究成果を世界に発信し、国内外の医学・医療に貢献して参りました。第一期の新設医学部として創立されて50年、長年にわたる多くの方々の御支援と御尽力のおかげで、地域に根差し世界に羽ばたく医学部として、素晴らしい成長を遂げることができたと考えております。

医学部創立50周年を記念した事業として、市民公開講座を8月20日にいよてつ高島屋ローズホールにて、医学部創立記念日イベントを9月29日に重信キャンパスの40周年記念講堂にて開催、記念式典・講演会・祝賀会を10月7日にANAクラウンプラザホテルにて挙行予定です。また、医学部創立50周年記念誌を発行するとともに、「未来の愛媛大学医学部を発展させる次世代の若者育成強化事業」を実施する運びとなりました。これは、重信キャンパスで学ぶ学生達の修学・活動環境を整備することで、愛媛大学医学部の輝かしい未来の実現を目指す取り組みです。本記念事業の核として、下図に示す様な「50周年記念総合学習棟」を、医学部同窓会との共同プロジェクトとして築造したいと考えております。次なる50年へ、更なる飛躍を目指すため、本趣旨をご理解いただき、「50周年記念事業寄附(目標額2億円)」への、皆様の格別の御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。



スマートフォンから左の  
QRコードを読み取ってください。

なお、個人として10万円以上、法人として50万円以上の寄附をいただいた方は、医学部内に設置いたします銘板に掲示させていただく予定です。また、ご寄附は寄附金控除の対象となります。





## 田内 久道 (平成元年卒・11期生)

(愛媛大学大学院医学系研究科 感染制御学 教授)

2023年6月1日に愛媛県の寄付講座として感染制御学講座が設置され、責任者を担当することになりました。本講座の医師は感染症内科から講師の村上雄一先生（感染症専門医）、小児科から助教の濱口ひかる先生が参加してくれています。

感染制御学とは、医療施設における感染防止策を科学的根拠に基づいて行う学問です。病院のような体の弱っている人たちが密集して生活している場では、感染症はまたたく間に広がります。これをどのように防止するかを科学的に解析し実践していく、ナイチンゲールの時代から続いている課題でもあります。

院内感染対策は水や空気の管理、清掃などの衛生環境整備から始まりますが、近年では、分子遺伝学的手法を用いた院内感染経路の解析、耐性菌の遺伝子解析、職業感染対策とワクチン接種、医療関連感染対策、難治性感染症に対する検査及び適切な治療支援、など学問的な重要性も増しています。また、行政組織と連携した新興、再興感染症対策の重要性はCOVID-19パンデミックで新たに認識されました。

現在の感染症の診断と治療に関しては、微生物検査法や抗微生物薬の進歩が著しく、全ての臨床医が最新の情報を入手し適切に使用することは困難な状況となっています。当院の微生物検査室には他にはない優秀な人材と最新の検査機器を有しています。また大学病院では臓器障害により体内薬物動態が安定しない数多くの患者の診療を担当していますが、そのような患者に対してpharmacokinetics解析のうえ適切な薬剤投与の設計が可能な専門の薬剤師も複数在籍しています。これらの微生物の拡散を防ぐ戦略に詳しい専門看護師も活躍しています。私は感染症専門医の立場からこのような資源を有機的に活用することにより、全ての患者に対して最良の感染症診療を提供していきたいと考えています。

感染制御学講座では引き続き中央診療施設としての感染制御部の運営を行うとともに感染症内科や小児科などの臨床部門や、総合臨床研修センターとも綿密に協力して感染症に関わる多職種の人材育成に関与していきたいと考えています。

まだまだ発展途上の講座でありますため、今後も同窓会の先生方のご支援をどうぞ宜しくお願い致します。



## 宮崎 龍彦 (平成2年卒・12期生)

(岐阜大学医学部附属病院 病理部 教授)

愛媛大学医学部同窓会会員の皆様、こんにちは。11期入学、12期卒業の宮崎龍彦です。小生、2022年1月1日付で、岐阜大学医学部附属病院病理部教授を拝命いたしました。松山を離れて10年、岐阜の地でしっかり仕事をさせていただいています。愛媛大学では、田部井亮先生が主宰なさっていた第二病理に入局し、その後能勢真人先生との出会いがあり、第二病理からゲノム病理学分野と名前を変えた教室で、自己免疫疾患の感受性因子（ゲノム）の解析、オミックス解析に携わってきました。マウスのゲノム解析・蛋白解析を進める一方で、自分の好きな診断病理にもガッツリ関わり、日本病理学会症例研究賞（B演説）を2000年11月に受賞しました。2007年から2008年にかけて文科省在外でドイツ・ハイデルベルクにあるドイツ国立癌研究所に留学させていただきました。その後2013年に岐阜大学に移り、病理部臨床教授として、焼け野原状態だった病理部の再興に取り組みました。赴任時は小生含め病理部スタッフ2名、専攻医（大学院生）3名で、日々の診断を回すことで精一杯でしたが、今では10名を超える専攻医を擁し、医師スタッフも臨床助教・医員ながら4名増え、講座の先生方のご協力もいただき、20名を超える病理医が診断にあたる、東海地区でも有数の病理部門となりました。臨床検査技師も8名から10名に増え、2017年から5年連続で病理の保険償還日本一（600床クラスの大学病院）をキープしています。関連病院も15から20に増えました。社会的には、現在、日本臨床細胞学会東海連合会長を務め、日本病理学会中部支部も担当することにもなりそうです。また、課外活動として、愛媛大学では、本学オケ、医学部室内楽、医学部吹奏楽の皆さんと活動しておりましたが、岐阜大学でも医学部室内楽の指揮者・指導者として、岐阜の誇るサランカホール（客席700余のクラシック専用ホール）で学生とともに美しい音楽を届けることができています。来る愛大医学部50周年記念式典には帰松して、愛媛大学医学部室内合奏団・吹奏楽部合同オケとともに学歌を演奏します。

ここまで来られたのは、小生を育てくださった愛媛大学医学部の皆様の恩賜と感謝しています。今後とも何卒よろしくご指導・ご鞭撻のほどお願い申し上げます。



堀内 史枝 (平成10年卒・20期生)

(愛媛大学大学院医学系研究科 児童精神医学 教授)

愛媛大学医学部同窓会会員の皆様、2023年4月1日より児童精神医学講座の教授を拝命いたしました堀内史枝と申します。本講座は、愛媛県の寄附により開設され、私と河邊憲太郎准教授の2人体制で運営をスタートしております。私は、兵庫県神戸市で育ち、神戸女学院で学ぶ中で精神科医療に携わりたいと思うようになり、愛媛大学に入学いたしました。1998年に同大学を卒業後、現在の精神神経科学講座へ入局し、当時の田邊敬貴教授の元で、精神科医師としての

の第一歩を踏み出しました。愛媛大学や神戸の精神科病院にて基礎を学ばせて頂いた後、英国に渡りロンドン大学にて神経科学を学び直し、モーズレー病院にて子どもの精神科臨床の研鑽を積む中で、我が国での児童青年精神医学の更なる必要性を痛感しながらも、やるしかないと心に決めて帰国いたしました。田邊教授・池田准教授の温かいお言葉に感謝しつつ、2003年に愛媛大学に帰らせて頂き、子どもの精神科の専門外来を開始しました。

一例一例、丁寧に「診る・見る・観る」「聞く・聴く」を心がけ、患者さんから多くの学びを得ました。また、子どものころを育むためには、医療の提供だけでは十分とは言えません。個に合わせた教育・福祉との連携を心がけました。2015年には、受診しやすい環境を整えるべく、小児科・周産母子センター・睡眠医療センターの先生方にお力添えを頂き、「子どものころセンター」を開設いたしました。センター開設により受診のハードルが下がり、幼児期の患者さんが増えました。中学卒業と同時にセンター卒業とすることで、大人の精神科外来へのトランジションがしやすくなりました。より専門性の高い外来診療の場を作ることができたと自負しております。外来の拡充により入院を要する子どもたちが増えましたが、愛媛県には子ども専門の精神科病棟がありませんでした。そのため、愛媛県に子どもの「育ちの場」としての専門病棟の必要性・重要性を訴え続けました。上野修一教授にもご支援をいただき、厳しいコロナ禍ではありましたが我々の願いが叶い、愛媛県立子ども医療センターに児童思春期病棟を開設して頂けることになりました。2024年11月にオープン予定の児童思春期病棟の設立と運用に向けて、ひいては愛媛県の子どもの「ころ」を育むことを目標に児童精神医学講座が開設されました。

ゆかりのなかった愛媛に飛びこみ、愛媛に育てて頂いた思いが強くなります。今後も、児童精神医学を通して、子どもたちが暮らしやすい社会の一助となるべく、精進したいと考えております。愛媛大学医学部同窓会の諸先生方には、ますますのご指導ご鞭撻を賜りますよう、今後とも宜しくお願い申し上げます。

新任教授からのメッセージ



佐野 由文

(愛媛大学大学院医学系研究科 先進呼吸器外科学 教授)

愛媛大学医学部同窓会会員の皆様、昨年11月より新たに先進呼吸器外科学講座を開設、教授に就任いたしましたので一言ご挨拶申し上げます。

と申しましても、私は2010年にこちらに赴任して参りまして、附属病院呼吸器センター長および心臓血管・呼吸器外科学講座の准教授として10年余り仕事させていただきましたので目新しさはないかもしれません。

ご存じの方も大勢いらっしゃるかと思いますが、赴任して以来ことあるごとに、「私は愛媛大学の呼吸器外科を日本一にするために来た」と申し上げて参りました。まず私が講座運営のうち最も重要と考えているマンパワーの獲得ですが、赴任時1人であった医局員は、現在学内で働いてくれている仲間は8人に、また赴任以来仲間となってくれた同門は20人を数えるまでになりました。また講座および外科系の臨床、研究、教育に欠かせないのが手術数です。2009年には110例/年であった呼吸器外科の手術数は2020年には281例/年まで増加しましたが、その後COVID-19の影響に加えて、病院の規模と手術室の規模が足枷となり、2021年には237例、2022年には224例と減少してまいりました。我々の頂いている手術枠ではこの数が限界で、その結果、肺癌を中心に行っている患者さんの手術がおおよそ1.5か月から3か月待ちという状況となってまいりました。病院各方面にこの現状を何とかすべく働きかけ続けてきましたが、病的には限界ということで、この手術難民となった患者さんにとっての新たな方策を考えてできたのがこの「先進呼吸器外科学講座」です。つまり呼吸器外科難民となった患者さんの手術の受け皿となる施設を作っていく、またそれら施設で見つかった患者さんを大学病院で高度先進医療の恩恵に浴していただく、そういった大学病院中心ではありますが、その枠内にとどまらないネットワークを形成して診療および教育を行っていく、そのような目的を持った講座です。

私が赴任当時に申し上げておりました「愛媛大学の呼吸器外科を日本一にする」ことはそのような理由で座礁してしまいましたが、我々の行っている診療内容はおそらく日本のトップクラスであるということはおそらく自他ともに認められるものと考えております。これを真の日本一にしていく礎を盤石にするためもう少しではありますが努力していければと考えております。今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。



## 石丸 啓

(愛媛大学大学院医学系研究科 地域低侵襲消化器医療学 教授)

2023年4月1日付けで愛媛大学大学院医学系研究科地域低侵襲消化器医療学講座教授を拝命いたしました石丸啓(いしまるけい)と申します。愛媛大学医学部同窓会の皆様にはいつもお世話になっております。

私は愛媛県今治市の出身で、高校までは愛媛で過ごしました。1995年に浜松医科大学を卒業したのち、同大学の第二外科学講座に入局しました。その後は静岡県・愛知県・福井県そして栃木県の関連病院で、多くの先輩方に指導を受け勉強してまいりました。愛媛に戻ってきたのは2011年です。愛媛医療センターに勤務したのち、2014年から愛媛大学消化管・腫瘍外科で渡部教授のもと、研鑽を積んでまいりました。

そして2020年に地方自治体(愛媛県伊方町)の要請を受け、地域低侵襲消化器医療学講座を主催する運びになりました。ちょうどコロナが猛威を振るい始めた時期で、新講座がスタートしたものなかなか思うように進んで行かず、非常に苦勞いたしました。2023年になり、コロナが5類感染症に移行することが決まり、これから様々な方面に活動を広げていこうと考えております。まずはサテライト講座である瀬戸診療所でオンライン診療を早期に開始したいと考えております。本講座は自治体からの寄附講座でありますので、大学での医療と地域医療の二刀流という事になります。当初は別々の医療が必要ではないか、と考えていましたが、実際地域での診療を開始してみると、二刀流とはいえ患者を診るという点では全く同じことをしているわけで、根本的な意識としては、全く同じ気持ちで取り組むことが正しいアプローチである、という感覚を得ています。地域住民のお役に立てるよう、そして愛媛大学のために全身全霊で仕事をしていきたいと考えております。

今後は診療のみならず、臨床研究および基礎研究を推進するとともに、次世代を担う若手医師の育成にも力を入れていきたいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

### 2023年度同窓会役員

役 職	氏 名	卒業年(期)	所 属
会 長	薬師神 芳 洋	S63 (10)	臨床腫瘍学
副 会 長	武 田 定 典	S58 (5)	武田脳神経外科
	羽 藤 直 人	H元 (11)	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学
常 任 幹 事	藤 山 幹 子	H元 (11)	四国がんセンター 皮膚科
	日 浅 陽 一	H 2 (12)	消化器・内分泌・代謝内科学
	西 村 隆	H 4 (14)	附属病院 循環器病センター
監 査	檜 垣 高 史	S63 (10)	地域小児・周産期学
	恵 木 浩 之	H 6 (16)	消化管・腫瘍外科学
幹 事	坪 井 敬 文	S55 (2)	先端研究・学術推進機構プロテオサイエンスセンター
	松 田 正 司	S55 (2)	医療法人 順風会 老人保健施設 長安
	上 甲 康 二	S56 (3)	済生会西条病院・内科
	高 田 清 式	S56 (3)	附属病院 地域医療支援センター
	土 手 健 太郎	S56 (3)	愛媛県立中央病院 麻酔科
	大 谷 敬 之	S63 (10)	星の岡心臓・血管クリニック
	熊 木 天 児	H 7 (17)	附属病院 総合臨床研修センター
	濱 田 信	H 7 (17)	四国がんセンター 感染症・腫瘍内科
	鈴 木 純	H 8 (18)	附属病院 医療安全管理部
	鍋 加 浩 明	H16 (26)	松山大学 薬学部 医療薬学科
事 務	池 内 佳 代 子		

[2023年4月末日時点の役員]





## 田中 潤也 (特別会員)

(愛媛大学大学院医学系研究科 分子細胞生理学 教授)

### 30年間の愛媛大学での仕事を振り返って

1994年3月に、愛媛大学医学部第2生理学の助教授として大阪大学より赴任し、およそ30年が経ちました。

最初の頃は、大学に人が少なく静かなのにびっくりしていました。しかし、共同研究施設での予約が取りやすいことやRI施設のスペースの広さ、図書館での調べ物のしやすさ、学生・大学院生と教員との距離の近さなど、研究遂行上の利点がたくさん感じられました。当時の前田信治教授には自由に研究をさせていただいたこともあり、私の研究者人生の中では、助教授時代が一番自由で楽しく、活発に研究できていたと思います。愛媛で始めたマイクログリアの研究がそれなりに評価されましたし、研究費も当時の積極財政の時代と相まってかなり潤沢でした。

1999年に旧第一生理学の教授となり、教務委員長になりました。その頃、大学の教養部廃止や医学教育改革が行われ、医学科内では国家試験合格率が国立大学全国最低、臨床実習日数が全国一短いなどのたくさんの課題がのしかかり、研究どころではない数年間がありました。教養教育の生物学の代わりとなる科目として「基礎医学展望」を開講したものの学内での協力が得られず、90分授業を年間67コマやっていたのがかなり苦しかった思い出です。履修人数30人足らずの選択科目であった「医科学実習」を必修の「医科学研究」にし、「医科学研究発表会」を始めましたがこれも当初は難題が続きました。必修科目にも関わらず各講座の受入人数を合計しても、1学年の定員に到底満たず、私の研究室で20人ほども収容していて大混乱でしたが、それなりに面白かったです。今は、医学研究重視がコアカリにも大きく記載され、受け入れ学生数が学年定員を大きく上回る良い時代になっています。次に、大学院学務委員長をやりました。大学院教育の実質化が唱えられ、講義・実習・演習科目の定義づけと運営、大学院GPという国の予算をとっての取り組みを行い、現在の枠組みができました。

部活動では、弓道部とワンダーフォーゲル部の顧問をやりました。弓道部は弓道場が学内に作れなかったのが心残りです。ワンゲルは、部員の皆さんと山の話で盛り上がるのが楽しかったです。地方大学医学部は厳しい時代を迎えています。大きな大学ではできない人材育成に重点を置いて、今後も発展を続けていって欲しいと願っています。



## 高田 泰次

(愛媛大学大学院医学系研究科 肝胆膵・乳腺外科学 教授)

### 退任のご挨拶

2024年3月末をもって約15年間勤めた教授を退任するにあたりひと言ご挨拶を申し上げます。

私は昭和58年(1983年)に京都大学医学部を卒業するまでの24年間京都で生まれ育ちましたが、その後医師になってからは各地を転々として参りました。福井医科大学、山口県萩市の都志見病院で勤務し、1988年に大学院生として京都大学に帰学。1995年に筑波大学消化器外科学講座講師として異動し、2003年に京都大学移植免疫医学講座助教授として戻ったのち、2009年7月から愛媛大学教授(当初は肝胆膵・移植外科学)として着任しました。1年間留学したフランスのストラスブール大学も含めるとこれまで5つの大学医学部(病院)で勤務したことになり、それぞれの大学で、それぞれの学風・流儀を体感してきました。今から思うと、行く先々で京都人として斜に構えながらも徐々に適応して行ったように思います。それは愛媛大学にも当てはまることですが、前身である愛媛大学旧第一外科の歴代教授は京大外科の先輩であり、着任した当初から教室の雰囲気にはなじみを感じられました。

着任時の目標として、まず第一に私の専門である肝移植に関して愛媛大学での肝移植医療の拡充を掲げました。また肝胆膵外科の領域では、高難度手術を安全に行える体制を確立し症例を増やすとともに、世界に通用する論文を書き論理的な思考に基づく外科治療を実践できるAcademic Surgeonの育成を目指しました。

今実績を振り返りますと、肝移植については着任以降これまで生体肝移植88例、脳死肝移植9例を実施し、愛媛大学としては2001年以降総数123例となっています。特に2015年に四国で初めての脳死肝移植実施施設に認定され、肝移植の基幹施設としてレベルアップすることができました。また日本肝胆膵外科学会の定める高度技能専門医修練施設Aに認定され高度技能専門医を育成するとともに、講座のもう一つの柱として乳腺センターを設立・運営し高度専門化した乳腺外科診療を推進して参りました。研究に関してもここ数年は大学院生の研究業績や英語論文数もコンスタントに増えており、ようやく自分が目指した講座の形ができてきたように思います。今後は、消化管・腫瘍外科学講座と肝胆膵・乳腺外科学講座が密接に連携し愛媛大学消化器外科のプレゼンスをさらに高めていただきたいと願っております。



## 萬家 俊博 (昭和59年卒・6期生)

(愛媛大学大学院医学系研究科 麻酔・周術期学 教授)

### 退任にあたって

この度、2024年3月31日をもって定年を迎え、退職することとなります。1978年に愛媛大学医学部医学科に6期生として入学して以来、様々な方々から教わり、様々な方々と共に学び、様々な方々と共に医療や教育や研究を実践して参りました。私と関わりを持って下さった方々に深く感謝申し上げます。

1984年に卒業と同時に麻酔学講座に入局し、麻酔科医としての第一歩を踏み出し、手術麻酔、集中治療、ペインクリニック、救急医療、手術部管理、医療安全管理などに携わり、気がつけば40年が過ぎました。当時はストレート入局であり、研修1日目から手術室で全身麻酔導入を指導医とともに始めるという、オンザジョブ・トレーニングのみが修練の方法でした。当時は麻酔薬として、ハロタン、エンフルラン、フェンタニルなどしかなく、血圧や脈拍のコントロールが難しく、また、パルスオキシメータや呼気終末二酸化炭素モニタもなく、麻酔科医自身の五感がモニタとなり、呼吸・循環管理を行っているという時代でした。現在の多様なモニタ機器を駆使し、手術中の安定した循環動態を保つことが容易である状況とはほど遠いものでした。しかし、この経験により現在の自分の患者安全への感性を鍛えてもらったと考えていて、決して無駄ではありませんでした。

2010年から手術部部長となり、全国国立大学病院手術部会議の幹事の役割も与えていただき、他の国立大学病院手術部の運営管理状況について情報交換することができ、当院手術部が他大学と遜色のないように医療機器などの整備に注力しました。歴代病院長にはご無理を言って、予算措置をしていただきました。中でも手術映像をネットワーク上で管理し、電子カルテ端末で視聴できるシステムを導入できたことに大きな満足を感じています。

2019年からは、副病院長(医療安全・危機管理担当)を拝命し、病院の安全管理に注力しました。COVID-19パンデミックの2020年~2023年5月までは、手術枠を臨時的に削減・調整する対策などにも奔走し、かなりの精神的、肉体的ストレスを感じましたが、何とか現在の状況へ持ち込めたかなと少し安堵しています。

このように振り返ってみますと、明確なビジョンを持って人生を歩んできたとは言いがたく、その折々に与えられたことを一所懸命やってきた結果が今であると思います。見えない力が自分に働いて、今のこの立ち位置に導かれたのだと感じています。40年間、麻酔科医不足に対応するために厳しく辛い場面も数多くありましたが、麻酔・周術期学講座に入局し、麻酔科医としての道を選んで、心の底から喜びを感じています。

## 医学祭を終えて

### 第45回愛媛大学医学祭実行委員長 熊ノ郷 頼之

(医学部医学科4年)



今年(2024年)は5月20日、21日に第45回愛媛大学医学祭を開催させていただきました。今回の開催につきましても多くの方々のご協力がありましたので、まずは厚く御礼申し上げます。今年の医学祭は長い中止期間を経て、ようやく45回目を迎えることとなりましたが、それは運営に携わった実行委員のみならず、ボランティア職員や教職員の方々、近隣の住民の方々の温かいご声援のおかげであると思っております。

さて、今年の医学祭で我々は、「新天地」というテーマを掲げました。このテーマはコロナ禍で苦しい思いをしてきた私たちの新しい未来に向けた挑戦を願うという強い思いと熱意を込められており、我々はその熱意を冷ますことなく、中止期間後初の開催となる医学祭の運営に真摯に取り組むことが出来ました。その熱意が空に届いたのか、当日は土日共々、雨の予報を打ち破り、5月とは思えぬほどの晴天、暑さとなりました。おかげさまで、多くの方にご来場いただき、各種企画は歴史的な大盛況となり、お客様のみならず、運営に携わった学生にとっても非常に喜ばしい結果になったのではないのでしょうか。

また、講演会では本大学の分子細胞生理学講座教授の田中潤也先生に、「世の中で最も大切なもの：ネズミに学ぶ研究」をテーマにご講演をいただきました。科学的根拠をもってしても説明しきれない、いのちの価値という多面的なテーマをご自身の研究分野である脳科学的な見地から熱心にお話しいただき、いのちの尊さや家族の絆、正義感について、再考するきっかけとなるような貴重な講演会となったと思います。

その他、「KEYTALK」によるゲストライブ、サークルバザーや子供向けの企画展示などは徹底した感染対策を取りつつも、老若男女問わず多くの方々に楽しんでいただけたと思います。看護科体験ツアー、キャンパスツアーでは将来の医療を担う可能性を秘めた高校生の凛々しい顔、ステージ企画ではこの日のために精一杯練習してきた、各種の部活、サークルの輝かしい姿を見ることができました。

COVID-19の世界的流行という大きな課題に直面しつつも医学祭全体を通して特に大きな問題も起こらず、無事終了することができましたのは、実行委員会以外の方々の多くの方々からのご支援があったからだ実感いたしました。

最後になりましたが、第45回愛媛大学医学祭にご協力してくださいました皆様方に、実行委員一同、心より感謝申し上げます。





## 基礎医学研究の道を選んで

**富永 真琴** (昭和59年卒・6期生)

(生理学研究所 生命創成探究センター 教授)

6期生の富永真琴です。

愛媛大学を卒業後、循環器内科のトレーニングを受けた後に、京都大学大学院に入学して心筋炎の研究を始めました。2年間で論文化に必要なデータを得ることができたので(幸運1)、電気生理学を学ぼうと生理学講座の門を叩きました。心筋炎のメカニズム解明に電気生理学が必要だと考えたからです。大学院を修了した後、生理学講座で指導して下さった岡田泰伸先生(生理学研究所元所長、総研大元学長)が生理学研究所に教授として異動され、誘われました(幸運2)。悩んだ末に、臨床を辞めて基礎医学の道に進むことを決断しました。その時点で、自分としては研究の方が楽しい、自分の才能では両方することはできない、と思ったからです。

当時の循環器内科の篠山重威教授から「帰ってこれると思うな」と退路を断たれた形でした。生理学研究所で助手として3年間務めた後に、カリフォルニア大学サンフランシスコ校のDavid Julius教授の研究室に留学しました。最初の仕事は、パッチクランプ実験台を作ることでした。研究室で遺伝子クローニングされたカプサイシン受容体TRPV1の機能解析を自分で作った実験台で行いました。留学中にTRPV2の機能解析にも携わり、分子生物学も学ぶことができました。TRPV1がイオンチャネル型受容体だったのは幸運でした(幸運3)。

1999年に帰国して「TRPチャネルによる温度センシング」の研究を始めることにしました。TRPV1は痛みセンサーですが、初めて分子実態が明らかになった温度センサーでもあったからです。その後、11の温度感受性TRPチャネルが発見され、温度感知の研究は大きく進みました。2000年に三重大学での教授職を得て、以後、2004年に生理学研究所に移り、24年間にわたって思うままに温度感受性TRPチャネルの研究を進めることができました(幸運4)。また、重点領域研究「細胞感覚」、新学術領域研究「温度生物学」の代表を務めることができました(幸運5)。そして、温度感受性TRPチャネルの発見によって2021年にDavid Julius教授はノーベル生理学医学賞を受賞しました。2023年度からは学術変革領域研究A「冬眠生物学2.0」で、温度感受性TRPチャネルの冬眠への関与の研究を進めています(幸運6)。

素晴らしい共同研究者、幸運に恵まれて今があると思っています。ただひたすら朝から晩まで研究に没頭してきた人生でした。愛媛大学の後輩のために何も役に立つことは言えませんが、努力すれば道は開けると伝えたいです。



## 人間到る処青山、あるか!?

**石井 一弘** (昭和63年卒・10期生)

(筑波大学医学医療系 神経内科学 准教授)

筑波大学 神経内科に入局して35年が過ぎた。地元に戻っての研修医(レジデント)生活は楽しいはずであったが、完全アウェーで、しかも神経系の知識がゼロであったので大変に苦勞した。加えて、伊予弁のイントネーションが抜けずに患者のプレゼン時には失笑された。レジデント終了と同時に旧)東京都精神医学総合研究所(森 啓先生)でアルツハイマー病の研究を開始、留学先はドイツのハイデルベルク大学ZMBHでアルツハイマー病とミクログリア研究を行った。研究は面白く「3年延長して研究するか?」と聞かれたが丁重に断り、講師職で筑波大学に戻った。

アルツハイマー病研究を帰国後も続けていたが、2003年に偶然にも茨城県神栖町の飲用井戸水汚染によるジフェニルアルシ酸中毒を見つけて、私の研究・医師人生は激変してしまった。まず、数ヶ月間で過去の公害病の資料、裁判記録を読み漁った。毒物学のご高名な先生方は親切であった。頼んでもないのにヒ素関連の論文、総説、資料を送りつけてくる。水俣病や和歌山カレー事件の詳細な分厚い臨床、疫学総説、裁判資料を読み、将来、自分の身に降りかかるかもしれない災厄を想像すると正直、落ち込んだ。「事件は初動が重要」「裁判に堪えられる客観的臨床指標」が絶対必要と確信していたので、「何をすべきか!」は判っていた。ただし、「実行可能であるか?」だったのだ。私はツイていた(と思う)。環境省医系技官の某女史が私と全く同じ考えで、全面協力してくれた。法案を最速で作り上げ、閣議了解で通してしまった。医療手帳交付をジフェニルアルシ酸のばく露のみで交付し、さらにはばく露者全員をほぼ毎年、神経診察・画像検査することができた。これで客観的所見を積み上げて裁判資料に出来るし、補償金算定の証拠にもできる。幸いにも民事(行政訴訟)・刑事裁判は起こらなかったが、一部の被害者が公害等調整委員会に提訴した。茨城県の行政権限不行使を指摘され結審した。当初のマスコミの騒ぎぶりは何処へやら、殆ど話題にされなくなり、約10年で見舞金を受領して頂き、ばく露者全員から署名を頂いた。金額決定から3ヵ月である。被害者診察は現在も細々と続けている。某女史の依頼で公害等調整委員会の専門委員として、水俣病認定、ランク変更の診察も始めた。そして、水俣病の真の病巣の根深さを体感している。神栖も水俣のようにならなくて良かったな、心からそう思える。





## 愛大での日々、そして今

志水 太郎 (平成17年卒・27期生)

(獨協医科大学 総合診療医学 教授)

このたびは本会報寄稿のご依頼を賜り大変光栄です。すでに卒業後20年近くが経過しましたが、在学時のことは鮮明に覚えています。つい先日も東京で数名の同胞と旧交を温めたばかりですが、しばらくぶりの再会も昨日ぶりのことのように、大学の同期との繋がりとはかくも強いものかと感慨に耽っていたところでした。

愛媛大学医学部での学びは今の医師としての基礎を形成してくださったと思っています。多様な授業や機会を通じ、医学知識や考えだけでなく、人間性や倫理観も養うことができました。解剖学第一講座、病理学第二講座、室内合奏団、自治会活動での学び、様々な先生方の厳しく温かいご指導、愛媛でのお一人一人との貴重な出会いと交流が、私にとって医師としての大きな礎となっていると感じています。今の自分があるのも愛大での日々があったからこそです。さらに卒業後も同窓会や会報を通じて、多くの先輩方や同期の方々と交流を深めることができます。このような素晴らしい機会の存在も愛大OB/OGの連綿とした絆があればこそだと感じています。

感謝の気持ちだけで今回の寄稿の字数を超えてしまいそうなので、この辺りで現在自身が行っていることについて記載させていただきます。じつは在学中よりしばらく脳外科医を目指していましたが、初期研修中の後の師匠との出会い、その後の紆余曲折で国内外約250施設ほどの様々な診療経験から、現在では総合診療と括られる横断的で俯瞰的な診療のやりがい、楽しさに気づきました。急性期の現場が多かったことから、医学的診断の正確性が医療の質に直接影響することを痛感し、自らの研究テーマとして診断の思考プロセスを形式化・標準化してあらゆる医師に標準装備できるような形式知を確立する事に強い関心を覚えました。この分野は独創的であり世界的にも同テーマでの研究を推進している方はいらっしやらないと思います。「診断戦略(医学書院)」という名の著書を2014年に発表したことを皮切りに、この分野は国内外での関心を集めゆっくりと成長を続けています。現在は自身のチームと国内・世界の仲間とともにこの分野を中心に医療の質を高めるよう邁進していきたいと考えています。自身のその他の関心には病歴・身体診察、総合診療(特に病院の総合診療)分野をさらに発展させること、国内の初期臨床研修の質の向上させることについての仕事がありますが、また別の機会があれば紹介させていただきます。

## 医学科学力向上推進委員長から

小林 直人 愛媛大学医学部附属総合医学教育センター 教授

会報をお読みの同窓会員の方々は、ご自身が医師国家試験を受験された時のことを覚えておられるでしょうか。その頃と比べると現在の国家試験はずいぶん様変わりしたな、と感じていらっしやる方も多いのではないのでしょうか。

現行の医師国家試験は、大きく必修問題とそれ以外に分けられ、それぞれ合格基準が異なりますが、本学では必修問題の基準に達しない学生がいることが課題となっておりました。そのため2016年(平成28年)から、同窓会の皆様のご支援により、必修問題対策セミナーを開講しております。コロナ禍でもリモートで開催し、また学生の意見を聞いて担当講師を変更するなど、セミナーの内容も見直しております。おかげをもちまして、セミナー開始後の国家試験合格率はかなり良好で、直近の第117回では全国平均を大きく上回る結果でした。

医学科では、校友会や連携病院長会議、医学部支援基金等からのご支援もいただきつつ、一人でも多くの学生が順調に国家試験に合格できるよう取り組んでおります。今後は、卒業時の臨床実技試験(pcc-OSCE)が公的化・国試化される動きもございます。引き続き、温かいご支援をよろしくお願い申し上げます。

## 最近の愛媛大学医学部医師国家試験合格状況

年度(回)	区分	受験者数	合格者数	不合格者数	合格率(%)	順位
令和4 (117)	新卒	112	108	4	96.4	11位
	既卒	9	7	3	77.8	国立平均
	計	121	115	7	95.0	92.4%
令和3 (116)	新卒	116	111	5	95.7	20位
	既卒	12	7	5	58.3	国立平均
	計	128	118	10	92.2	92.2%
令和2 (115)	新卒	112	104	8	92.9	33位
	既卒	9	5	4	55.6	国立平均
	計	121	109	12	90.1	92.8%
令和元 (114)	新卒	116	109	7	94.0	23位
	既卒	6	4	2	66.7	国立平均
	計	122	113	9	92.6	92.8%
平成30 (113)	新卒	103	99	4	96.1	3位
	既卒	9	8	1	88.9	国立平均
	計	112	107	5	95.5	90.2%
平成29 (112)	新卒	113	106	7	93.8	13位
	既卒	13	11	2	84.6	国立平均
	計	126	117	9	92.9	91.2%
平成28 (111)	新卒	104	94	10	90.4	31位
	既卒	13	9	4	69.2	国立平均
	計	117	103	14	88.0	90.7%
平成27 (110)	新卒	117	104	13	88.9	37位
	既卒	12	11	1	91.7	国立平均
	計	129	115	14	89.1	91.7%
平成26 (109)	新卒	100	94	6	94.0	33位
	既卒	13	7	6	53.8	国立平均
	計	113	101	12	89.4	91.8%
平成25 (108)	新卒	99	89	10	89.9	37位
	既卒	11	8	3	72.7	国立平均
	計	110	97	13	88.2	91.5%

※ 順位は、国立大学法人42大学中の順位です。

# 50周年に向けて、6期生雄志座談会

## (1) 自己紹介

**薬師神)**39号同窓会誌に掲載する6期生の座談会を開始します。まずは自己紹介を順番にお願いします。



**高梨)**高梨秀一郎(たかなししゅういちろう)です。顔を見渡すと、この中では学生時代、私が一番出来が悪かったので、ちょっと話が合うかどうか分かりません。現在は東京で心臓外科をやっています。所属は川崎幸(かわさきさいわい)病院。アカデミックワークは、国際医療福祉大学で教えています。最近、目がよくなり、眼鏡を外しました。というのも、去年の春から乗馬を始めました。競技にでるくらいの本格的な乗馬です。それで、遠くを見るようになったからか目がよくなって、40年目で初めて免許証のメガネの条件がなくなりました。

**薬師神)**続いて、富永先生。

**富永)**富永真琴(とみながまこと)です。内科を4年経験してから、後は基礎研究のみです。患者さんは診ていません。今は岡崎にいます。2年前に自分たちがやった仕事がノーベル賞に繋がったので、ちょっと忙しくなりました。

**薬師神)**何度かテレビに出られましたよね。『チョコちゃんに叱られる!』でもインタビューされていて、「おっ」と思いながら見ていました。

**富永)**昨日もイランのTVから取材を受けました。今は冬眠のことを研究しています。大きなお金をもらっているの、研究を続けられる場所を探しています。



川崎幸病院  
副院長 高梨秀一郎



生命創成探究センター  
教授 富永 真琴

**松浦)**松浦文三(まつうらぶんぞう)です。愛媛県松山市出身です。大学卒業してから愛媛大学第3内科に入局し、教育出張として済生会小田病院に3年余り、学位研究が終わった後に愛媛医療センターに3年余り、そしてアメリカに1年間留学した以外は愛媛大学に31年間在籍しています。2010年から、寄附講座である地域生活習慣病・内分泌学講座に所属しています。

**萬家)**萬家俊博(よろずやとしひろ)です。大阪出身です。私も大学卒業してすぐに愛媛大学の麻酔科に入局しました。関連病院をまわって、最終的に、1997年からずっと大学の麻酔科、麻酔・周術期学講座の所属です。現在、手術を増やせ、増やせという厳しい状況の中で、麻酔科のスタッフを守るため、あいだに立って頑張っています。自分が教授になってだいぶメンバーも増えたので、少しはうまくまわっていると思います。今は退官に向けて、最後の仕事を頑張っています。来年の3月で退職予定です。

**薬師神)**座談会に来られるのは、あと1年ぐらいで定年になる方々がほとんどです。言いたいことを言っていたかというのも趣旨の一つです。続いて大上先生、お願いします。

**大上)**大上史朗(おおうえしろう)です。松山市出身です。大学卒業してからすぐ愛大の脳外科に入局しました。関連病院で勤務後、愛媛大学で長く働いていましたが、2016年から愛媛県立中央病院の脳外科で勤務しています。現在は脳卒中センター長という役職です。センター長と言いながら、私自身は専門が脳腫瘍です。脳卒中の診療は若い先生に任せて、脳腫瘍の手術を中心に診療を行っています。再来年の3月に定年退職なので、その先をどうしようかなと考えています。

**村上)**村上早織(むらかみさおり)です。隣の大上先生とは、中学校からずっと同級生です。私は松山市から出たことがありません。卒業してからは松山市民病院で勤めて、1991年に開業。開業したときに、美容皮膚科と一緒に併設したので、今も皮膚科と美容皮膚科と二つの診療科をしています。ただもう、だいぶ飽きてきて、2020年のコロナが流行った頃にフラメンコスタジオを立ち上げました。またカラーゲンペプチドブランドを立ち上げて商品開発をし、アカデミックではない、いろんなことに向かっています。



村上皮膚科クリニック  
院長 村上 早織

**薬師神)**愛媛県では村上先生が一番顔が売れています。いろいろなところでお顔を拝見します。





愛媛大学大学院医学系研究科  
麻酔・周術期学  
教授 萬家 俊博

## (2) 学生時代の松山市や愛媛大学と現在

**薬師神)** 座談会のテーマに入っていきます。学生時代の松山市や愛媛大学の印象はどうでしたか。

**富永)** 私は松山から6年間離れませんでしたが、道後に住み、毎日道後温泉に行っていました。今日は朝着いたので、松山を少し歩いてきました。何にも変わってないです。建物は変わっていますが、雰囲気というか空気感は変わっていないと思います。いいところだと再確認しました。

**薬師神)** 萬家先生はずっと愛媛にいらっしゃいますが、いかがでしょうか。

**萬家)** 僕が入学して入ったときに、病院の北側あたり、瓦礫も混ざった土が盛られていたし、この東側のちょっと高台になっている駐車場のあたりにも土を盛っていたと思うんです。だからか、何にもないえらいところに来たなと思った記憶があります。

**薬師神)** 村上先生は大学にもいらしたけど、学内まで入るのはしばらくぶりでしょう。

**村上)** すごく久しぶりです。確かに見た目には変わっていますが、基本形は変わっていませんね。病院には何かと行くこともあるのですが、こちら側に入るのは久しぶりです。



愛媛県立中央病院  
脳卒中センター長  
大上 史朗

## (3) 学生時代の思い出

**薬師神)** 続いて、学生時代のことをお聞きします。大上先生、6期生ってどんな学年でしたか。

**大上)** 私たちは、センター試験、以前は共通一次試験と言っていましたが、それが始まる1年前の、一期校・二期校の時代の最終学年でした。多くが、一期校を落ちて、二期校に合格して、愛媛大学に来たという集まりの学年です。私たちで、やっと1年生から6年生までそろい、どの学年の人にもかわいがっていただきました。反面、常に上の学年と比べられて、「上の方がもっとよかったのに」とか言われていた記憶もあります。

**薬師神)** 松浦先生は入ったときの印象を覚えていますか。

**松浦)** 今は女子学生が半分以上ですけど、当時は18人。人数は少ないのですが、非常にアクティブで、男子学生の方が小さくなっていました。仲は良く、各実習グループは女子が引っ張っていました。

**薬師神)** なるほど。学生時代の文化祭やクラブ活動とか、そういう思い出はありますか。

**松浦)** 運動系では少しだけラグビー部に所属していました。医療系サークルでは、保健医療研究会に入りました。寄生虫学の平井助教授が顧問で、ほぼ毎日寄生虫学の教室に出入りしていました。

**薬師神)** 大上先生はバスケットボール部ですよ。

**大上)** 1年生のときはバスケットボール部がなく、ラグビー部に1年生から4年生まで所属し、3年生のときにバスケ部ができたので、6年生まで所属していました。3・4年生はバスケとラグビーの両方を掛け持ちしました。あとは、1年生のときに高梨先生が作ったテニス同好会があり、それにも多分3年生か4年生までは入っていて合宿も行きました。



1979年(大学2年時)の保健医療研究会メンバー  
於: 寄生虫学教室  
2期生: 新開、坪井 3期生: 山泉 5期生: 渡部  
6期生: 松浦、吉田、玉井  
7期生: 大久保、串畑、加藤、篠崎(鳥居)、畠中  
(敬称略)

**高梨)** その同好会は人気で、6期生の半分くらい入っていたと思います。



愛媛大学大学院医学系研究科  
生活習慣病・内分泌学  
教授 松浦 文三

**薬師神)** 富永先生はどうでしたか。

**富永)** 僕はMSGという「みんなで・しっかり・がんばろう」という…(笑)ではなく、「Medical Service Studying Group: 医療を考える会」に入っていて、高橋先生や木村先生を中心に公衆衛生を主に学んでいました。

**薬師神)** 萬家先生はサッカー部でしたよね。私ども野球部の部室のすぐ横だったからよく覚えてます。

**萬家)** 野球部とサッカー部は、入口が一緒で部室が別じゃなかったですか？

**薬師神)** 学生時代印象に残る先生や思い出はありますか。先日、木村先生や出崎先生が亡くなられてしまいましたが。

**村上)**基礎の思い出としては、顕微鏡も標本も全部家に持って帰って宿題をしようと。そのときに家が火事にあい、顕微鏡も標本も全部燃やしてしまいました。大学から国有財産である顕微鏡も標本も破損したから責任があると言われ、燃やしてしまった分のプレパラートのセットができるまで、ずっと病理教室に通わされました。

**薬師神)**富永先生は基礎配属とか行かれたか。

**富永)**記憶にございません…。多分、行ってないです。むしろ卒業してから、解剖の高島先生のお別れ会に行った思い出があります。あと、生化学教室の准教授の斉藤先生とずっと一緒に、そのお弟子さんの箕越先生と岡崎と一緒に働いています。箕越先生は1歳年上、仲良くさせてもらっています。

**薬師神)**松浦先生はどうでしたか。

**松浦)**基礎配属では寄生虫学でお世話になり、当時寄生虫学の講師だった塩飽先生や大学院生の坪井先生(前プロテオセンター長)に、感染した寄生虫から分泌される成長因子について基礎的な実験を教えていただいた覚えがあります。

**薬師神)**寄生虫の試験は嫌じゃなかったですか。

**松浦)**あまり気にならなかったです。病理の福西先生が厳しかったです。

**薬師神)**基礎の話で盛り上がりましたが、臨床における実習などは印象に残っていますか。

**高梨)**皮膚科の三木先生。結構ダンディな感じで映画『マイ・フェア・レディ』に出てくるような方でした。日産のフェアレディZが愛車でカッコ良かったです。また、心臓外科の石戸谷先生にはお世話になりました。心臓外科に興味があったので、卒業時に相談。「成人の心臓外科を専門にするのなら愛媛に残らない方がいい」と。それで県外に出ることにしました。

**薬師神)**自分の人生を導いてくれた方の1人ですね。

**高梨)**もう1人印象に残っているのは泌尿器科の竹内先生です。僕は泌尿器科の卒業試験に落ちました。それで、竹内先生のところに「行くところがありません」と相談。竹内先生の同級生が兵庫医大の教授だったので紹介してもらいました。

**薬師神)**泌尿器科教室の竹内教授も本当にユニークな方でしたよね。大上先生は、どうして脳外科に入られたのでしょうか。

**大上)**どうしてでしょうね…頭の手術をしてみたいな、と思っていましたが、騙されたと思います(笑)。今の研修制度だったら入らなかったでしょう。というのも、入局当初には、翌日というか翌朝5時とかに終わるような、日をまたぐ手術が3週間か4週間連続でありました。私の最長手術時間は翌日の午後2時で、上の先生方が手術している間の手術中には床に座って寝ていたのを覚えています。その時には、入局する医局を間違えたなと思いました。

**薬師神)**今は働き方改革で、そんなに働いたら大変なことになりますけど、当時はそういうことはなかったですからね。村上先生はどうして皮膚科に進んだのでしょうか。

**村上)**皮膚科は女子が男子より「ちょっと得意な分野」です。女子の体力は男性よりは少ないし、どんなに頑張っても「男並みに働くじゃないか」と言われるだろうなと思うと、女性が得意な分野に行きたいと考えました。子どものスキンケアは母親の自分がするし、女性の化粧のことも男性の医師よりもバックグラウンドが分かります。ただ皮膚科も最初は「女子はダメ、入れない」と門前払い。小児科と皮膚科と麻酔科は、女性はいらないと聞いていました。

**薬師神)**「女医さんはいない」とはっきり言われたのでしょうか？

**村上)**私が直接言われる前に「この科は女性がいない」という噂を聞きました。それで、皮膚科の三木教授に直談判。直接話をして、最後はどうか承諾してもらいました。

**薬師神)**今はそんなことを言うと大変なことになります。松浦先生は名物教授の医局に入られたわけですね。

**松浦)**そうです、第3内科の太田教授は内科教授そのものというような方でした。当時の内科は三つに分かれていました。第3内科は消化器と内分泌代謝が専門でした。専門的な領域に興味あって、第3内科に入りました。当時医局長をされていたのが谷口先生(現市立大洲病院の院長)。公私にわたって相談させてもらい、それが縁で第3内科に入局したようなものです。

**薬師神)**萬家先生は、麻酔科ですが、当時二代目の教授でしたよね。

**萬家)**教授が休職中で、新井先生が准教授のままでという体制でした。新井先生は怖かったです。今でも、やっぱりちょっと怖いですね(笑)。

**薬師神)**でも、新井先生は面倒見がよく、授業は面白かったです。富永先生は臨床の先生の記憶はいかがですか。



**富永**循環器外科では体力的にこれは持たないと思って、循環器内科に。そこからちょっと実験がだんだんと楽しくなってきました。京都大学の循環器に入って、病院を出て大学院に入ったときに、基礎研究をしてみようと思いました。

#### (4) 大学への要望

**薬師神**皆さんは卒業されて39年です。大学に対し「こうなってほしい」という要望はありますか。

**高梨**いろんなところから教授になってくれと言われました。しかし卒業生が母校の教授になるのが一番しっくりきます。教授職には奉仕的な側面があって、たくさんの人のために行わなければならないことがあります。萬家君にはわかると思いますが、自分のやりたいことができないのが教授という職ではないでしょうか。そういう人たちに支えられているのが大学。この構造が変わっていかないと、優秀な医師が経済的にも恵まれ、アカデミックなポジションもあり、世界的に認められることにはなっていないと思います。もっと大きく大学組織全体が変わってほしいと思います。

**薬師神**もう少し詳しく話してください。

**高梨**例えば、教授を辞めて、どこかの病院の病院長になる。病院長になると、今までやったことがない経営をやらされる。これではダメです。自分がやりたいことをして、やりたいこと以外は、専門の人にサポートしてもらおう。その人に合わせたサポート体制ができることが必要です。

**薬師神**今、大学は教育と研究と臨床の三本柱と言われます。全部やるのは無理です。

**高梨**僕は本当に手術ができる外科医を育てようと思ってきました。そして今まさに、そういうシステムを作ろうとしています。

**富永**私の本籍は宇和島。愛媛県はとても田舎な場所があり、地域医療が一番大事なことだと思います。また私は東海地区にもいました。当時いた大学はすごく古い大学。ナショナリズムが強くて、無茶苦茶な人事をしています。全然実績や成果のない人を連れてくることがあります。それはもう、大学の終わりです。だから、大学はいい人事をしていただきたいです。あと臨床をしてから基礎にきたので、全身の臓器研究が身についています。それは医学教育を受けているからです。基礎研究の大切さも教えて、年に1人でも2人でもいいから基礎研究にいく人を作ってもらいたいと思います。

**薬師神**松浦先生は大学にずっといらして、今は地域医療もされています。どんなことを思っていますか。

**松浦**新臨床研修制度が始まって、我々のストレート入局時代と比べて、明らかに愛媛県で研修する医師数が減っています。特にこの2～3年は非常に減っています。内科の専攻医を志望する人も少なくなっています。愛媛県の医療は愛媛大学が支えないといけませんので、このままでは愛媛県の医療は厳しくなっていきます。

勧誘は、臨床実習が始まる4年生の12月～1月くらいから、卒後2年の初期臨床研修の間、ずっと付き合っている状況です。そのあたりがうまくまわっていけばいいと思うものの、具体的に何をどうすればいいかわかりません。

**薬師神**萬家先生はいかがですか。

**萬家**大学は教育・研究・臨床と言います。一般病院と同じで、収益を上げて病院経営をしていかないとはいけません。手術増加も言われ、手術件数も増やさないとはいけません。教育もしないとはいけません。教官の立場は高梨先生の言う通り、手術もやって診療もやって、患者さんを目の前にして、その片手間にといい方も言い方が悪いですが学生を育てる必要があります。地方大学では圧倒的にマンパワーが足りません。本当に教育を考えたら、国自体がもっと真剣に考えて、教員も増やさないとはいけません。医学教育や医師育成にお金を使わないといけないのに、安いお金で医師を作っているというのが現状です。国立大学医学部病院長・医学部長会議でも病院の経営が悪いとか、お金をくれないとか、お金の話になってしまいます。

**薬師神**さすが大学教授だけあって、批判の的も大きいです(笑)。

**萬家**今の状況が改善しないと、若い先生たちがまた同じ目にあうのもかわいそうだと思います。

**薬師神**大上先生は大学外にいらして、大学と連携しながら第一線の県立中央病院にいます。



2016年の同期会(於:名古屋マリオットホテル)

**大上)** 県立中央病院は救急もあって患者さんがたくさん来ます。しかし、学生や研修医を指導する先生は兼任です。専任できちんと教えていかないと、本来の教育にはならないと思いますので、専任の医師ができればと思っています。あと、研修先やその後の入局先が、ある一定の診療科に偏ってすごくアンバランスです。例えば、忙しそうな診療科には、入局が少なく、特に外科系全般に来なくなっています。僕らの時代は、3分の1くらいが外科、3分の1が内科、3分の1がマイナーな科に行くバランスでした。また、ほとんどの学生が興味ある疾患とか興味ある教室とか、学生時代の興味で入局していました。今の学生や研修医はそこに別の打算が入っているのではないかと考えてしまいます。解決策はわからないのですが、一つには給与差をつけるということも現実的な対策ではないでしょうか。アメリカは人数制限もありますし、診療科によって高い給与と低い給与で差がついています。日本も何かしていかないと、続けられる診療科と衰退する診療科で分かれていくことになると思います。



**薬師神)** 制度がなかなか改善していきません。

**大上)** 大学病院の中でも、例えば売り上げに応じて、給料が変わっていくとか。同じように働いて同じ給料という体系ではこのままの傾向が続くようで心配です。

**高梨)** 山形大学はインセンティブがあると聞いています。例えばある病院では3万点以上の手術に手術インセンティブが付きます。それは診療科にもつくし、ナースにはその手術に入ったら千円とか二千円手当が付きます。

**薬師神)** 開業医の先生からのご意見はいかがでしょうか。

**村上)** みなさんの話を聞いて納得です。うちの病院は城北地区にあり、患者さんが望むのは松山日赤病院や県立中央病院です。疾患によっては大学病院を勧め、個人病院ではできない特別な医療を求めて紹介しても、「適応外のことではできません」と大学から返答が来てしまいます。患者さんのことを考えると、大学病院に送らないで松山日赤病院や県立中央病院になってしまいます。

**薬師神)** なるほどです。私は第一内科出身で、いつも初代教授の小林先生から「大学病院は最後の砦だから患者を絶対断るな、どんな患者が来ても受け入れなさい」と言われていました。ちょっと残念です。

**松浦)** 大学で高度先進医療を行うときは、中心に診療する人が申請を出して、病院の承認を受け、一定の治療数後に報告という仕組みはできています。だから新しい手術もできます。皮膚科医のマンパワー不足などが原因かもしれません。

## (5) 学生・若いドクターへメッセージ

**薬師神)** いろいろな課題が見えて、いいお話を聞けたと思います。最後に、これからの学生や若いドクターへメッセージをお願いします。

**村上)** 開業医の私は「発見の窓口」になっていると思います。例えば、化粧品による白斑の事件。2～3年前から、変に感じるというか、おかしい?と思うような患者さんが次々に来ていました。そういうときに私も「何かおかしい。この患者さんたちはみんな同じ化粧品を使っている」と思ってリストアップしました。化粧品メーカーに言っても相手にされないし、皮膚科学会の地方会でも「そんなものは普通の白斑だろう」ということで無視。でも、数年経っていきなりテレビなどで取り上げられ、おおきな話題となりました。お茶石巖も宮崎の開業医の先生が「最近、目が腫れるなど、これまで診たことない患者さんが来る」という発信から表に出ました。厚生省認可の商品でも健康被害は起きます。その起点は医師がなることが多いです。社会的責任が医師にあります。「まさかとは思わない(いつも疑問を問い続ける)力をずっと持つておこう」というのが私の信条です。「もしかしたらこうかもしれない」という力を絶対忘れてはいけません。若い人たちにも「そんなことはないだろう」「そんなこと、ありえないよ」で済まさないでほしいです。「何かおかしい、見たことがない」と思ったら、何かあるはずと気づく、医師は社会的な責任ある立場だということを感じてほしいです。

**薬師神)** 年を取ると、そういう感覚は薄れてなくなっていきます。大上先生、お願いします。

**大上)** 自分自身がまじめな学生ではなかったもので、「しっかり勉強しろ」ということは言えないです。スポーツを含めいろいろな活動をしながら、卒業試験に通って国家試験に合格して、で構わないと思います。その中で、自分が興味あることを見つけて、基礎に進んでもいいし、臨床でも内科や外科でもいいです。自分の興味を優先すれば必ず続けられると思うので、自分の興味があるものを見つけて、それに邁進してほしいです。



**萬家)**今は医療安全にも関わっています。患者さんと医療サービスと、いろんなコンフリクトがあります。結局、医学的・医療的に正しいことをしていても、医師として患者さんへの説明がうまくできていないとか、医師と患者さんとの関係性がうまくいってなくてちゃんと説明に至っていないとか、そういうところに躓きがあります。僕たち医師は感情のある患者さんを相手にしています。医学を学び、経験を積んでいく過程で、患者さんも感情のある人間だということなどをどこか忘れてしまうときがあります。医学的に正しいことをやっている、ガイドラインに則ってやっているけど、患者さんの感情を逆なでするような喋り方とか態度とかになってしまいます。患者さんの考えていることを推測して、患者さんの表情や言葉を捉えて、適切に返事できるようなコミュニケーション力というのは、意識して深いコミュニケーションを常に持たないと、養われない部分です。そういう深いコミュニケーションをしないで過ごしてしまうと、これから多分、いろんなところで訴訟になるでしょう。医師になる心構えとしては、患者さんの気持ちをきちんと把握した上で、中には無茶なことを言う患者さんもありますが、うまくかわせるようなコミュニケーション能力を持っておく必要があると思います。

**薬師神)**大学の先生らしい非常に現実的なメッセージをいただきました。松浦先生はどうでしょうか。

**松浦)**私は自己紹介で言いましたけど、アメリカ留学を1年間しました。留学したときは40歳。「四十にして惑わず」という言葉がありますが、そんなことはなく戸惑いを感じながらも非常に良い経験をさせてもらいました。この数年間は、コロナ禍で留学したいけど行けないという思いをした若い人がたくさんいたと思います。臨床で留学するにしても、基礎研究で留学するにしても、視野が広がります。また、留学で知り合ったボスや同僚とは、今でもメールでやり取りしながら、研究のことをいろいろと相談させてもらっています。若い人にはぜひ留学を目指してほしいと思います。

**薬師神)**富永先生、お願いします。

**富永)**着任して24年になります。いろんな大学で24年間、生理学の講義をしていて、昔と比べると学生は覚えることがいっぱい増えて、カリキュラムも大変になって、本当に疲弊しています。我々のときには2年間教養で遊べていましたけど(笑)。今はそんな暇はありません。僕はそんな中でも医学以外のことに自分が目を向ける時間を持ってほしいなと思います。大変ではありますが、それが将来役に立つのではないかなと思います。

**薬師神)**最後に、高梨先生。

**高梨)**どの先生が言っていることも、本当にそうだと思います。頭で計算してはダメです。医師として、人間としてフラットな気持ちでないと、新しい興味も湧いてこないし、分からないことがあっても次の答えが出てこないと思います。人とコミュニケーションをとるときもそうだと思いますが、自分は分からなくて当たり前という気持ちがないとうまくいきません。いわゆる頭がいいと言われる人たちはだいたい自分の行き着く先をうまく計算します。自分の行き先がこのあたりだと思ってしまう。そうすると、もう少し伸びるのに、自分が「このあたりだ」と計算してしまったのでそこまで止まってしまいます。僕はそういう自分で計算ができないから、大学を飛び出し、大学に所属しないでいろんなところで心臓手術をしてきて、今に至る。だから、学生さんに言いたいのは、下手な計算をしない、ワクワクするような人生を送ってほしい、という事です。

**薬師神)**いいですね。ワクワクするような、というのは高梨先生だから言えることかもしれません。

10月7日に50周年記念式典がありますので、またお会いできる方も多いと思います。今日は皆さん、本当にありがとうございました。



6期生謝恩会

## 恩師をおたずねします



### 「あの頃の思い出」

嶋津 孝 (特別会員)

(愛媛大学医学部名誉教授<元医化学第一講座教授>)

私が東京都精神医学総合研究所から医化学第一講座に着任したのは1980年春の頃でした。初代教授の須田正巳先生は医学部創設の激務が原因で病魔に倒れ療養中で、先生の提唱された“丸ごとの生化学”の流れを引き継ぐこととなりました。当時はまだ医学部の卒業生は1～2期生を送り出したくらいで、実際に医化学の授業を担当したのは5期生以降ではなかったかと思いますが、新設大学医学部生としての希望と覇気に満ち溢れていたように感じました。

古い大学と異なり研究室の人数も少なく、基礎配属の学生さん達と一緒に動物実験に励み、コンパや歓迎会と称して意見交換の場を通じて人間的接触を密にしたことが楽しい思い出となっています。また講座間の交流も盛んで、とりわけ、解剖学の上原教授、細菌学の内海教授の研究室とは足しげく、夕方になるとアルコール類を持ち寄って談論風発の議論に時の過ぎるのを忘れることもありました。殊に、春の季節を迎えると図書館前の咲き誇る桜の下で、飛び入り参加の方々を含め、無礼講の酒盛りと語らひは終生忘れることはできません。私と同世代であった、お二人の先生は既に鬼籍に入られ、今はご一緒に盃を交わしながら往時を語ることも出来なくなりました。

基礎配を通じて、あるいは大学院を含む卒業後研修のある時期、共に研究生活の喜びや苦しみを味わった、いわば同じ釜の飯を食った仲間は少なくありませんが、それらの方々や広く医学部卒業生の皆様が全国各地の大学や研究所ならびに医療機関で、研究者としてあるいは医療者として責任ある地位で活躍されているのを見聞することは、誠に誇らしく嬉しい限りです。

本年9月には愛媛大学医学部は設立50周年を迎えるとうかがいました。既に還暦を過ぎた卒業生も少なくないと思いますが、この機会に各地でご活躍中の医学部同窓生の方々にお目にかかれることを楽しみにしています。あの頃、まだ若かった(?)私も齢91歳の老境に入りましたが、当時から研究テーマとしていた“代謝の中樞神経性制御”に今もこだわっています。この代謝制御系が、メタボ・2型糖尿病の成因や老化を防ぐメカニズムなど病態とどのように関わっているかに注視しています。まさに、『流れにのるは易く、流れを作るのは難し』の心境で消光しています。



### 「愛媛から世界へ」

野元 正弘 (特別会員)

(愛媛大学大学院医学系研究科 名誉教授・客員教授  
<前 薬物療法・神経内科学教授  
現 済生会今治病院 臨床研究センター長/脳神経内科>)

愛媛大学医学部の発展を嬉しく拝見し、また同窓生の活躍を頼もしく感じています。今回、同窓会誌に原稿依頼をいただきました。私は2001年に赴任したので20年以上を愛媛で過ごしています。学生時代を群馬県の前橋で過ごし、鹿児島大学へ入局して最初の赴任地(現在の後期研修医)は大分県立病院に勤務しました。その後、British Council Scholarとしてロンドンへ留学し、帰国して熊本にある環境庁国立水俣病研究センターへ赴任。更に、鹿児島大学で脳神経内科、薬理学を担当し愛媛大学へ赴任。6つの県/国で生活し勤務してきましたが、私たちは皆同じように生活し、同時に少しずつ違って、いわゆる県民性/国民性を感じ楽しんでます。

現在は済生会今治病院へ赴任しています。約20万人を診療圏とする中核病院であり、放射線診断部門が充実し、愛媛大学同窓の先生方が活躍してくれていて有難いと感じています。また疫学的な内容を扱えることから、高齢のために診断できなかった疾患の疫学と予後の改善をテーマとして研究を進めています。業務はセンター長として赴任し現在は臨床研究センター長ですが、同時に一人医長として5年が経過し、皆さんの応援をもらって受診して下さる患者さんも増えました。日々の診療とともに薬物動態臨床試験による創薬を始めており、創薬を市中病院でもできることを広げたいと考えています。

今治は造船とタオルの町で、世界と全国に常に視線を送っているビジネスの町と感じます。原稿を書いている本日はバリシッポの最中で、世界中の国からビジネスマンが集まり、造船技術や機器の展覧会と取引がなされており、国際学会の会場のような感じです。今年は特に南半球の国からの参加者も多いと感じます。造船は90%以上の業務が海外とのやり取りで、こちらは夜でも相手は昼間で24時間の活動になります。私たちも学会活動の国際化の一環として英語でのセッションを年々増やしていますが、ビジネスの町は私たちを先行しています。学生実習や研修医として、また今治へ赴任する機会のある時にはビジネスの今治を見ていただきたいと思います。

私たちは人体をテーマとしており、自分が直面している疾患や課題は世界中で皆が困っています。毎日の生活と診療を基本にして丁寧に対応し、コツコツと解決しながら発表を重ねていくと、その積み重ねは必ず世界へ通じます。是非、新しいことを見つけて発信して欲しいと思います。愛媛大学医学部同窓生の一層の活躍と発展を期待し楽しみにしています。



## 恩師をおたずねします



### 「忘れえぬ言葉」

石井 榮一 (特別会員)

(愛媛大学大学院医学系研究科名誉教授  
＜前 小児科学教授、現 今治市医師会病院院長＞)

愛媛大学を退職して早4年が過ぎました。大学時代は小児医療に邁進してきましたが、現在の病院では救急、小児医療、感染症が3つの柱であり、特にこの3年間は救急とコロナ診療に明け暮れる毎日でした。定年は新たな人生とはよく言ったものです。

さて私は九州大学を卒業して今年で45年になります。これまで医師として様々な経験をして現在に至っていますが、その時々先輩や同僚に言われた言葉を思い出します。忘れえぬ言葉は私にとって人生の道標でもあるのです。

昭和48年に入学した年は、九大医学部創立70周年でした。記念行事が福岡市内で開催され、講演会の隣の席に80歳台の先輩医師が座っていました。私が、「なにか一言アドバイスをいただけないでしょうか」と尋ねた時の言葉、「医療は一生勉強です。勉強しない日はない。勉強をやめたときは医師を辞めるときなんです」。緊張で名前も聞き忘れましたが、この言葉は今でも忘れることがありません。

昭和54年に卒業後小児科に入局しました。新入局の数名で入院患者の主治医になったのですが、当時のH病棟医長が私だけに難しい症例を担当させました。なんで私だけに、と文句を言った時のH先生の言葉、「君のためだよ、石井君。患者は医師にとって最高の教師だからね」。まさに愛媛大学の基本理念である「患者から学び、患者に還元する医療」に通じる考えだと思います。

平成5年にカナダの2年間の留学生生活を終えて帰国することになりました。当時の教授からは地方の病院への出向を命じられてショックを受け、医局を辞めることを決意しました。その時恩師のM先生から突然1通の手紙が来ました。そこに書かれていた言葉、「短気はいけな。人は風にそよぐ葦のように生きるべきだ。我慢すればきっと報われるから」。もしその言葉を聞き入れずに退局していれば今の自分はありませんでした。我慢することも大事、と悟った瞬間でした。

最後に今働いている今治のK医師会長に、「先生は真のリーダーをどう見分けるのですか」と尋ねた時の言葉。「簡単ですよ。その医局の若手医師や研修医をみればリーダーの器はすぐわかる」。リーダーたるもの、まず自分の足元を固めることが大事ということですね。

一見ありふれた言葉でも時と状況によっては一生心の中で光り輝くものです。一期一会は人だけでなく言葉との出会いでもあると思います。皆様、忘れえぬ言葉を糧に自分の医療の道を進んでください。

## 同期会報告

### 6期生同期会 報告

2023年7月16日(日)に松山市のANA クラウンプラザホテル本館4階ダイヤモンドボールルームにおいて、6期生(昭和59年卒業)同期会が開かれました。前回2016年に名古屋市で開催された同期会から7年ぶりの会となりました。これまでオリンピック開催年の4年ごとの開催を恒例としてきましたが、新型コロナウイルス・パンデミックのために2020年開催予定だったものが、企画しては中止、延期が繰り返され、今年37名参加で、何とか開催することができました。

この同窓会延期は残念なことではあったのですが、巡り合わせとして今年が同窓会会報の卒業生座談会企画が6期生の順番となった幸運も重なり、特別企画で、座談会の見学会と医学部ツアーも医学部キャンパスで行いました。座談会の内容はこの報告と同じ号に掲載されていますのでご覧下さい。医学部ツアーには13名の参加があり、学生時代とは大きく変化した医学部構内や地域医療支援センター3階のシミュレーションのエリアを案内しました。多くの参加者が卒業後39年ぶりに訪れた母校の変貌や最新の医学教育機器の発展に驚いていました。

夕方からホテルで集合写真撮影後、会食が始まり、スライドを用いての近況報告が続きました。7年前と比べて、子どもの独立やお孫さんの話題などが増えていると感じました。医師の仕事で常勤から非常勤へシフトし、趣味に充実した時間を使えているという近況報告もあり、これからの人生に彩りと深みを加えていくことを参加者各自が思い巡らしている様子でした。2次会には31名が参加し、いつもの如く、学生時代と全く変わらない飲み会となりました。

今回の企画、準備は、西原先生と向田先生が中心になって手配していただきましたことを心より感謝申し上げます。6期生メーリングリストでも両先生への賞賛と感謝の言葉が飛び交っていたことをお伝えします。次回は、3年後の2026年海の日に関西地区在住の有志が企画し、神戸市で開催する予定となりました。

(文責 萬家 俊博)



## 第2回愛媛大学医学部同窓会東海・中部支部総会報告

第2回東海・中部支部総会を令和5年1月14日、JPタワー名古屋ミッドタウン名駅サテライトで開催しました。長野県や静岡県など東海3県を超えて18名の参加がありました。薬師神芳洋(10期)同窓会会長には今回も来名いただき「愛媛大学医学部の現況開講と50周年記念行事」についてお話を頂きました。また、浜松医科大形成外科学教授の中川雅裕先生(13期)と岐阜大学病理診断科教授の宮崎龍彦先生(6期)に教育講演をお願いし、「みんなの知らない形成外科のがん治療」と「病理学は縁



の下力持ち ～形態診断からがんゲノム診断、そして深遠なる基礎研究まで～」をご講演いただきました。懇親会はJR名古屋駅セントラルタワーズ12Fの「嘉鮮」で開催しました。3年ぶりの宴席の方も多く、また数名が加わり、大学時代の思い出や愛媛の話題で盛り上がりました。第3回支部総会は、令和6年2月23日(金・祝日)16時から今回と同じ会場で開催を予定しております。東海・中部には、200名以上の同窓会員がおられますので、是非とも多くの会員に参加いただけますよう、お願いいたします。



(文責 東海・中部支部 事務局長 大石 久史 8期)

## 第21回愛媛大学医学部同窓会東日本支部総会報告

愛媛大学医学部同窓会東日本支部総会は、毎年1月の第4土曜日に開催され、本年の第21回総会は1月28日土曜日に19時よりリモート開催されました。

事務局は可能な範囲で頑張りましたが、同窓生の集まりは15名でした。コロナ第8波の影響で同窓会どころではない事情や、連絡がシンプルとなり当日の参加を忘れられた皆さんもおられました。本年の経験を活かし、2024年以降は少しでも多くの同窓生の皆さんにご参加頂き、楽しんで頂けるように準備して参りたいと思います。



第21回の当番幹事は21期卒の岡田一郎先生でした。岡田先生は国立病院機構災害医療センター救命救急センター医長であり、開会挨拶を頂きました。続いて、渡辺修一郎先生(桜美林大学健康福祉学群大学院 国際学術研究科教授; 8期卒)より会計適正処理の報告がありました。

特別講演1は、愛媛大学医学部医学科17期卒で、愛媛大学医学部附属病院総合臨床研修センター長/教授の熊木天児先生より、「コロナ禍におけるシミュレーション教育 ～ピンチをチャンスに変えた愛媛大学の取り組み～ ベッドサイドからのGlobal研究を目指して」をご講演頂きました。肝胆膵分野の世界的な業績を沢山あげられ、生涯インパクトファクターが835点との紹介に一同驚き。愛媛大学医学部卒で愛媛大学病院勤務でありながら、この業績をあげられる時代になったこと、この実績を創れる同窓生が現れたことを大変うれしく思いました。愛媛大学病院で世界レベルの仕事が確実にできている実感を持ってました。また、沢山の医局員や医学生を育てる人材育成のコツは、家康流に得意なことをさせて伸ばせると言われ、ご本人が生き生きと仕事をされておられるお姿が印象的でした。

特別講演2は、当番幹事の岡田一郎先生から、「災害医療とacute care surgery: どのように考え、関わるか」をお話し頂きました。東京都心での災害発生時の恐ろしさを紹介後に、災害医療はまず身の回りからの準備が大事。災害時には大量の外傷患者が発生するため、外傷診療も普段から敬遠せず関わっていきましょうとのメッセージを頂きました。この4月から、日本医科大学附属病院救命救急科講師に移られるそうです。

その後は懇親会。12名の皆さんから近況報告を頂きました。なんと10期生までの出席が2名でした。例年20名弱の参加があったことから、コロナ禍で諸先輩方の参加が激減した点を反省して、来年に臨みたいと思います。来年は2024年1月27日に開催予定で、当番幹事は22期生の横浜市立医大の西井先生の予定です。

東日本で働く愛媛大学医学部同窓生が大学病院や総合病院で働く場合は、担当患者の医療連携に支障をきたさないと思います。しかし、自らが開業したり、病院・施設を管理する立場になると、広く頼れる医療連携が必要になります。地元医師会に頼るだけでなく、同窓生の皆さんが東日本での医療連携で困ることがないように、本同窓会の皆さんが繋がり、医療連携の愛媛大学医学部基盤ができれば、嬉しいと思いました。

FBの東日本支部グループを通して、東日本で頑張る同窓生が病院や活動の紹介を投稿して、連携できる機会になればいいと思いますので、是非お気軽にご活用、ご協力して頂けると幸いです。

(文責 酒向 正春 9期)

(東日本支部会長; ねりま健育会病院長・ライフサポートねりま管理者)



## 第17回 愛媛大学医学部同窓会九州支部総会報告

愛媛大医学部創立五十周年おめでとうございます。

福岡は世界水泳大会が、ウイズコロナの状況の中、開催されております。

約4年のコロナウイルスにより九州支部同窓会が延期となり、今回開催できるか心配しておりましたが、7月22日ホテル日航福岡で行いました。

出席は1期生から19期生までに加え、今年は愛媛大学附属病院総合臨床研修センター長の熊木天児教授が本学より同窓会幹事として参加していただき、同窓会館の寄付につき説明をされました。(参加人数19名)

同窓会は、みんなの再会を喜び合いながら、開催。一方、今年なくなられた木村茂第二外科初代教授に対し、黙祷を行い、開宴となりました。

今年の講演は8期生の酒井浩一先生によるNHK大河ドラマ 韋駄天(いだてん) 金栗四三 春野スヤについてでした。酒井先生はその孫にあたり、金栗氏は1912年ストックホルム大会で、日本人で初めてオリンピックに出場した方で最初の東京オリンピックを招致した協力者の一人です。ドラマ主演の中村勘九郎や綾瀬はるかの素顔を含め秘蔵の写真を披露し講演していただきました。

その後、皆の近況を語らい、和気藹々とした同窓会でした。無事、再会を誓い閉宴となりましたが、今後の課題としては、九州内に200人近く同窓生がいるようですが、なかなか出席していただけないことです。

多くの皆さん今後の出席をお願いします。また同窓生の紹介もお願いします。



事務局 すみい婦人科クリニック (福岡市) 澄井 敬成(8期生) sumiifc@k9.dion.ne.jp  
愛媛大学医学部同窓会九州支部長 角 典洋(2期生)

(文責 角 典洋 2期)

## 愛媛大学医学部同窓会会則

### 第1章 総 則

第1条 本会は、愛媛大学医学部同窓会と称する。

第2条 本会は、東温市志津川454、愛媛大学医学部内に置く。

### 第2章 目 的

第3条 本会は、母校の創立精神を尊重し、会員相互の親睦を密にし、学術の向上を図り、母校の発展に積極的に寄与することをもってその目的とする。

### 第3章 事 業

第4条 本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 会員名簿、及び会報の発行
- (2) その他、本会の目的達成に必要な事項

### 第4章 同窓会会員

第5条 本会の会員を次の通りとする。

- (1) 正会員  
愛媛大学医学部医学科を卒業し、かつ会費完納の者
- (2) 学生会員  
愛媛大学医学部医学科に在学中の者
- (3) 特別会員  
愛媛大学医学部教員、及び元教員のうち入会を希望する者。但し、正会員を除く。
- (4) 準会員  
愛媛大学大学院医学系研究科を修了した者のうち入会を希望する者。但し、正会員を除く。
- (5) 賛助会員  
愛媛大学医学部、及び愛媛大学大学院医学系研究科に縁故のある者で、役員会の承認による。

### 第5章 同窓会役員

第6条 愛媛大学医学部同窓会に次の役員(計18名)を置く。

- |       |                                |
|-------|--------------------------------|
| 会 長   | 1名(任期は3年、2期6年を超えない)            |
| 副 会 長 | 2名(会長が指名し、役員会の半数以上の賛成をもって承認する) |
| 常任幹事  | 3名                             |
| 幹 事   | 10名                            |
| 監 査   | 2名                             |

第7条 本会の役員は、総会において正会員のうちからこれを選任する。

第8条 役員は、それぞれ次の職務を行う。

- (1) 会長は、本会を代表し、いっさいの会務を統括する。
- (2) 副会長は、会長を補佐し、会長に事故のあるときはその職務を代行する。
- (3) 常任幹事は、常時それぞれの担当会務を処理する。
- (4) 幹事は、会務に参画する。
- (5) 監査は、会務・資産及び会計の監査に当たる。

第9条 会長以外の役員の任期は1年(4月1日～3月31日)とし再任を妨げない。ただし満70歳定年制を定める(細則に記載)。

2. 補欠により選任された役員の任期は前任者の残任期間とする。
3. 役員は、任期終了においても後任が決定するまでは任務を行うものとする。

### 第6章 会 議

第10条 本会の会議は、会員総会、役員会(計18名)、及び常任幹事会(会長、副会長、常任幹事、計6名)の3種とする。

第11条 総会は、本会の最高決議機関であって会員をもって組織する。

2. 総会は、通常総会及び臨時総会の2種とし、役員会の決定に基づき会長がこれを召集する。
3. 通常総会は、年1回(8月第一週土曜日に)開催し、臨時総会は必要に応じて開催する。
4. 総会の議長は、出席正会員の互選によりその都度選出する。
5. 総会の議事は、出席会員の過半数の同意によりこれを決定し、可否同数の場合は議長がこれを決定する。
6. 次の事項は、総会の議決又は承認を得なければならない。

- (1) 役員の選任
- (2) 事業報告、及び当該年度の事業計画に関する事項
- (3) 予算、決算に関する事項
- (4) 会則及び施行細則の変更
- (5) その他、役員会が必要と認めた事項

第12条 役員会及び常任幹事会は、本会の業務を企画、運営し前条に定めた総会の議決を要する事項を除く一切の事項を議決する。

2. 役員会は第5章第6条の役員(計18名)をもって組織し、常任幹事会は幹事ならびに幹事・監査を除く役員(会長、副会長、常任幹事、計6名)をもって組織する。

- 役員会及び常任幹事会は、会長がこれを召集する。
- 役員会及び常任幹事会の議長は、会長がこれにあたり、会議を主宰する。
- 役員会は、役員会の過半数の出席をもって成立し、議決は出席役員の過半数の同意を要する。可否同数の場合は、議長(会長)がこれを決定する。
- 役員会は、次の事項を通常総会において報告しなければならない。
  - 事業報告、及び当該年度の事業計画に関する事項
  - 予算、及び決算に関する事項

## 第7章 会計

第13条 本会の資産は、次の各号をもって構成し、役員会がこれを管理する。

- 会費
- 寄付金
- その他の収入

第14条 本会の会計年度は、毎年4月1日より翌年3月31日までとする。

## 第8章 支部

第15条 本会は、役員会の承認を得て必要な地域に支部を置くことができる。支部には代表者を置く。支部代表は会長選挙において一票を有す。

## 第9章 雑則

第16条 この会則についての施行細則は、別にこれを定める。

### 附則

この会則は、1982年4月1日より施行する。

設立年月日 昭和57年4月1日

- 1982年12月20日、通常総会において改正
- 1986年3月29日、通常総会において改正
- 1991年3月30日、通常総会において改正
- 1999年5月14日、通常総会において改正
- 2017年5月19日、通常総会において改正
- 2018年5月18日、通常総会において改正
- 2019年8月3日、通常総会において改正
- 2020年8月1日、通常総会において改正

# 愛媛大学医学部同窓会会則施行細則

## (目的)

第1条 この細則は、愛媛大学医学部同窓会会則に基づき、本会の運営についての細則を定める。

## (会費)

第2条 会員は、下記の通り会費を納めるべきものとする。

- 正会員及び学生会員の会費(入会金を含む終身会費)は5万円と定める。
- 特別会員、準会員及び賛助会員の会費(入会金を含む終身会費)は2万円とする。
- 会費納入方法は別途定める。

## (同窓会役員)

第3条 会長は広く本同窓会の正会員(終身会員)から公募あるいは推薦し、役員会(現会長1、副会長2、常任幹事3、監査2、幹事10)ならびに\*同窓会地区代表幹事5で投票を行い、過半数を超えない場合は、上位2名による決戦投票の後、過半数を持って選出される。同票の場合は現会長が指名する。会長の任期は3年とし、役員会ならびに同窓会地区代表幹事(半数以上)の承認がある場合にのみ2期6年まで勤めることが出来る。

副会長2名は会長が指名し、役員会の半数以上の賛成をもって承認する。会長を含む全ての役員は満70歳になった時点で定年とし、会長ならびに副会長以外の役員が退会する場合、本人が後任を推薦し、役員会の半数以上で承認する(仮に否決された場合は再度推薦する)。

\*同窓会地区代表幹事とは、九州支部、中国支部、近畿支部、東日本支部、東海支部を指す。今後、全国の支部が幹事会の承認の元に増加した場合は、定員5を増加する。

第4条 会則第6条に定める役員のうち、副会長、監査、常任幹事の半数以上は学内の会員よりの選出とする。

## (役員会ならびに同窓会総会)

第5条 会の運営を行う常任幹事会(会長1、副会長2、常任幹事3)は必要時に不定期開催とし、役員会(会長1、副会長2、常任幹事3、監査2、幹事10)は4月ならびに、8月第一週の土曜日(同日同窓会総会を開催)に開催する。常任幹事会ならびに幹事会の決定事項は同窓会総会の承認(過半数)が必要であり、否決された場合は継続審議とする。会議には、会議録を作成し、出席会員2名の署名を要するものとする。

## (会議の運営)

第6条 本会の会務運営のため、次の各部会を置く。

- 庶務部
- 企画部
- 広報部
- 渉外部
- 各部に部長1名を置き、副会長又は常任幹事のうちから選出する。
- 各部の管掌する業務は別にこれを定める。

## (事務職員)

第7条 本会に事務職員を若干名置く。

### 附則

この会員施行細則は2020年8月1日から施行する。

この細則に定めていない規定は、役員会においてこれを定める。

# 愛媛大学医学部同窓会 申し合わせ事項

## 会費納入における申し合わせ

同窓会正会員費は終身会費5万円と定める。

会費は愛媛大学医学部入学時に一括5万円の納入を原則とするが、諸事情で卒業時までに全額納入する事も容認する。また、退学時要望があれば納入金を返却する。

2018年5月時点の卒業生で終身会員の手続きが未施行(全額納入していない)のものについては、2019年8月1日までに移行期間と定め、この期間に納入を終えない場合、同窓会正会員と原則認めない。

## 名簿等に関する申し合わせ

- 在校生にも会報・名簿を配布する。ただし、会費未納の場合は、会報のみ配布する。また名簿にも在校生を記載する。
- 名簿に掲載する住所は連絡先とし、自宅・勤務先・その他の連絡先かの選択は会員本人の任意とする。また、電話番号・電子メールアドレスに関しても掲載・非掲載は本人の意思によることとする。
- 2019年8月以後終身会費を納入していない会員\*には名簿を配布しない。

\*ここでいう「会費を納入していない会員」とは、終身会費を納めていない愛媛大学医学部卒業生を言う。

- 終身会費未納入者の卒業生には名簿を配布しないことを明記する。
- 名簿の配布は終身会員に限り、要望があっても終身会員以外には原則配布しない。
- 卒業生から要望があった場合、次の場合に限り送付する。
  - 会費を納めていなかった卒業生が終身会員として会費を納めた場合
  - 住所不明のため名簿が配布出来なかった終身会員である場合注：紛失した場合、複数部要望した場合は原則送付しない。

## 同期会についての申し合わせ

愛媛大学医学部医学科卒業生が同期会を開催するにあたり、次の条件が満たされれば愛媛大学医学部同窓会は5万円の援助を行う。

- 正会員20人以上集まること。
- 会の写真と報告文を(集会終了後4週間以内に)同窓会に提出すること(会報原稿用)。
- 開催予定日を事前に同窓会事務局に連絡の上、(集会参加者で)会費未払いの人へ納入のお願いを行うこと。
- 2年に1回とする。

## 支部に関する申し合わせ

- 支部立ち上げ時に限り1支部あたり10万円の援助を行う。  
注：今後、多くの支部が隣接に設立される可能性があるため隣接支部間で十分な協議を行いそのエリアを明確にする必要がある。

## 講演者旅費に関する申し合わせ

- 愛媛大学医学部同窓会会員が、同窓会の交流・連絡等の目的で出張する際には、バック料金(往復の旅費とシングル宿泊料金)を同窓会が負担し、何らかの理由でバック料金が使用出来ない場合には、往復旅費と一泊15,000円以内のシングル宿泊料金を同窓会が負担する。また、この金額を超える場合、追加料金分は会員自身の負担とする。ただし、特別会員の恩師を招待する場合はこの限りではなく、この費用については、同窓会長が判断し、役員会で事後に承諾を得ることを原則とする。

この申し合わせ事項は2022年8月6日から施行する。



## 医学部課外活動(運動部)紹介

### 愛媛大学医学部 空手道部

代表 仲田 淳之介 (医学科4年)

こんにちは。愛媛大学医学部空手道部です。

空手道部は男子3名女子7名の計10名で火・土曜日は医学部武道場、木曜日は芦原会館総本部で練習を行っています。ほとんどの部員は大学から空手を始めており、年3回の審査会で昇級し引退までに黒帯を取得することを目標に、楽しく、ときに厳しく稽古に励んでいます。

過去3年間は、新型コロナウイルス感染症によって大会が全て中止されていましたが、2023年3月には、私たち愛媛大学が主幹校となり、中国・四国大学医科学生空手道大会(中四国大会)を開催いたしました。また、8月には大阪にて西日本医科学生総合体育大会(西医体)が開催されます。現役部員にとっては初めての西医体となりますが、大会を通じて他大学の空手道部との交流を深めていきたいです。

また、普段の練習では、芦原会館総本部の先生から教えていただいたことを自分のものにできるように鍛錬しています。近年は部員数が減少傾向にありますが、部員同士しっかり協力しながら切磋琢磨していきます。

最後になりますが、こうして部活動に取り組むことができるのは顧問の打田先生を始めとしたOB、OGの先生方のおかげです。至らぬ点多々あるとは思いますが、努力してまいりますので今後ともご理解、ご協力のほどよろしくお願いいたします。



### 愛媛大学医学部 硬式庭球部

代表 林 俊哉 (医学科4年)

硬式庭球部は現在、男子21名、女子18名の計39名で活動しています。毎年8月に行われる西医体で上位入賞することを目標に、初心者から大会出場者までさまざまなテニス経験を持った部員が互いに切磋琢磨しながら少ない時間の中、集中してテニスに打ち込んでいます。現在の部員は、大学入学以来これまでの3年間をコロナ禍による行動制限をまともに受け、公式戦はもとより、対外試合、練習や親睦会なども自粛を強いられる日々を過ごしてきました。そんな中、基本に立ち返り、夏の暑さに耐えて戦い抜くための体力づくりとしてのランニングや、基礎的な技術を各々向上出来るよう球出し練習を増やし、漫然と球を打ち合うのではなく試合を想定し少しでも向上できるように練習を積みました。また、試合ができないときだからこそ、コートや部室を綺麗に整えるなどの環境整備にも力を入れました。

近年ではOB・OGの皆様にご支援いただき、大学テニスコートの改修工事を行って頂きました。土のコートから砂入り人工芝のコートに改修し、水はけもよく、雨の直後でも練習が行えたり、他大学を招いて対外試合を行えたり、活動の幅が広がりました。また、ほとんどの試合は砂入り人工芝のコートで行われるため、普段からより試合に近い環境で練習することができています。

ご支援の甲斐あり、男子部では2019年度の西医体で創部以来初となる優勝という快挙を成し遂げました。この場を借りてお礼申し上げます。コロナ禍で練習や試合が行えない状況から、行事や他大学との交流試合を行うことが可能になり、制限のない普段の部活へ戻りつつあります。しかし、部員の大半がコロナ以前の部活動を知らず、まだまだ手探りの状態です。コロナの影響で大きくあいた穴を埋められるよう、幹部が中心となり精一杯取り組んでいます。偉大な先輩方のバトンを受け取り、シードを守って後に繋げることができるよう今年度の西医体で上位進出、2連覇を目指して引き続き頑張っております。

OB・OGの皆様方には、なお一層のご支援をお願いいたします。今後とも、よろしくお願いいたします。



## 第39回愛媛大学医学部同窓会総会を開催しました

2023年8月5日16時より、松山市・リジェール松山ゴールドホールにて、第39回愛媛大学医学部同窓会総会を開催しました。



- # 1. 2022年度(同窓会活動)会計決算ならびに2023年度予算案の承認(審議事項)
- # 2. 2022年度同窓会の活動報告(報告事項)
- # 3. 医学部創立50周年記念事業(報告事項)
- # 4. 2023年度同窓会の活動(審議事項)
- 医学部創立50周年記念事業(報告事項)
- # 5. その他審議事項



に引き続き、特別講演(下記# 1、# 2)を開催。

- # 1. 坂井 晃先生(愛媛大学医学部8期生)  
福島県立医科大学 医学部 放射線生命科学講座 教授  
演題 「血液・腫瘍内科医から放射線生物学研究へー東日本大震災と福島原発事故から12年ー」
- # 2. 伊東 久雄先生(愛媛大学医学部1期生)  
藤沢善行ファミリークリニック勤務 元外務省医務官  
演題 「外務省医務官 25年を振り返って」

毎年8月第1土曜日、同窓会総会を開催します。2024年8月3日(土曜日)もどうか皆様ご参加下さい。各学年(期)同窓会との同日開始もお考え下さい。



# あ と が き

## ご 挨拶

第39号愛媛大学医学部同窓会会報、皆様のもとにお届けしました。楽しんでいただけましたでしょうか？第33号から39号にかけて足かけ6年、まさに事務の池内さんと2人3脚で、この会報の作成に携わって参りました。この仕事も今回で終わりとなります。私自身の同窓会会長職も2023年度をもちまして任期終了。コロナ騒動もあってか、あっと言う間の6年間でした。

少し振りかえらせていただきます。

2017年、この大役を仰せつかり私が掲げた目標は、同窓生の親睦を目的とした「開かれた同窓会」の運営です。そのための具体的案は、

- # 1. 時代に即した同窓会規約の改正と役員任期の規定  
(私自身の会長職の任期も「1期3年で2期を超えないと規定しました」)
- # 2. 同窓会会報の充実と多くの卒業生の参加を依頼する  
(多くの同窓生に寄稿を依頼し様々な方々とお会いする事が出来ました)
- # 3. 年に1度の同窓会総会の開催  
(「8月第1土曜日の午後を合い言葉にコロナの時期も何とか乗り越えました」)
- # 4. 全国同窓会支部長の役員会への(顔の見える)Web参加  
(嬉しいことに、私の任期中懸案であった東海・中部支部が設立されました。角典洋 九州支部会長、下原康彰 中国支部会長、田口潤智 近畿支部会長、村上信五 東海・中部支部会長、酒向正春 東日本支部会長の皆様、毎回役員会への参加、誠に有難うございました)
- # 5. 同窓生が集うことの出来る(同窓会の旗印となる)モニュメントの設立  
(同窓生が集う「旗印」が何とか欲しい！これは50周年記念行事として結実する運びです)この実現には、羽藤直人(現)医学部学部長や日浅陽一(現)副病院長のご尽力があったとのこと、本当に感謝申し上げます。

十分な活動とは言えませんでした、何とか形には出来たかと思えます。

さて、同窓会会長としての最期の年、これから医者として社会で活躍する後輩たちにかける言葉を探すため、「個人的な体験」をお話する事をお許しください。

卒業を目前とした6年の夏、西医体を終えた私は、将来や夢を模索していくつかの病院を見学させて頂きました。その一つ、浜松聖隷病院での事です。日本初の聖隷ホスピス(緩和ケア病棟)は平屋で、ベットの患者さんから花壇が楽しめます。大学病院とは異なるケア・マインドに感激し、当時のホスピス所長の原先生に申し出ました。

「緩和ケア病棟で働きたいと思います。」

原先生は柔和に微笑みながら、私に諭されました。

「若いうちから患者さんを癒す事を考えることは、とても大切なことです。しかし薬師神君、君はまだまだ若い。若いうちから患者さんを癒すことばかり考えてはダメです。若いうちは一生懸命勉強し、患者さんを治すことに集中しなさい。そして努力しても努力しても、私の歳になれば治らない病気がたくさんある事がわかる日が来ます。その時、ここに来れば良い。」  
そう話されたのでした。

これから医学という大海にこぎ出す、若い後輩に申し上げたい。世の中には、患者さんを「癒す」とか、患者さんに「寄り添う」とかいった言葉が氾濫しています。しかし、皆さんはそんな言葉を気にする必要はありません。ただ、ひたすら患者さんを治すことに集中してください。そして、努力しても努力しても臨床に行き詰ったら、ここに帰ってくれば良い。ここにいる皆さんの先輩や先生方が、君たちに基礎研究や臨床研究でヒントを与えてくれます。そしてまた臨床に戻れば良い。あるいは、基礎医学の世界に身を投じて良い。そういう事が出来るのが、医学部というところ。そして、そういう事が出来るのが、皆さんの母校である「愛媛大学医学部」というところ。そして、そういう事が出来るのが、皆さんの母校である「愛媛大学医学部」というところ。そして、そういう事が出来るのが、皆さんの母校である「愛媛大学医学部」というところ。

私も、あの頃の気持ちを忘れずに、そして、少し患者さんを癒す事を考えながら、もうしばらくここで患者さんの病氣と戦いたいと思っています。

愛媛大学医学部そして同窓生の皆さんに、苦難と喜びが多かれと願っています。6年間有難うございました。



薬師神 芳洋(10期生)  
(第6代会長:2017年-2023年)  
愛媛大学医学部臨床腫瘍学

# 《会員の個人情報に関する取り扱い》

愛媛大学医学部同窓会は、会員の個人情報の保護と適正な取扱いに取り組んでまいりますので、皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

## 1. 個人情報の使用目的

同窓会が取得した個人情報は、以下の目的に使用されます。

- ・同窓会名簿の作成
- ・定期的刊行物(会報、名簿)の送付
- ・同窓会会費徴収のための業務
- ・事務連絡及び各種文書の送付
- ・支部会の行事開催に関する事務連絡及び各種文書の送付

## 2. 個人情報の提供

会員から情報の紹介依頼があった場合、折り返し対応させていただきます。また、第三者からの電話照会等での返答は致しかねますので、ご了承下さい。

## 3. 個人情報の管理

「会員名簿」は、施錠保管しており、「データベース」は、インターネットに接続していない専用PCで独立した作業を行っております。

## 《次号会報原稿募集》

### ★同期会報告

幹事の方は、氏名、卒業年、開催予定日を事前にご一報下さい。

- 条件
1. 正会員20名以上の参加
  2. 報告文、集合写真を提出(会報原稿)
  3. 会費未納者への納入勧誘
  4. 2年に1回

### ★学生海外研修留学報告・医学祭報告(学生会員)

学年、氏名を事前にご一報下さい。

- 条件
1. 報告文、写真を提出(会報原稿)

## 《会費納入のお願い》

同窓会活動は、会員の皆様の会費で支えられております。会費納入をお忘れの方は、お早めに同封の用紙にてお振り込み下さい。

郵便振替NO. 01620-0-6644  
ゆうちょ銀行169店 当座預金6644  
加入者名 愛媛大学医学部同窓会  
入会金を含む終身会費5万円

## 《会員名簿の不正使用禁止》

会員名簿は、会則により会費納入者のみ、一会員一冊の配布となります。

第三者に渡り不正に使用されますと、会員に多大な迷惑がかかります。他人に譲渡しないよう、また破棄する場合も特段のご配慮をお願い致します。事務局としても最大の注意を払っておりますが、皆様のご協力をあわせてお願い致します。なお、会員名簿の再送付は致しかねますのでご了承下さい。

注)卒業生と偽り、名簿の請求や他の会員の住所照会の問い合わせ電話があります。原則として電話での問い合わせには、即答致しかねますので何卒ご了承下さい。また、不審な業者から会員の方へ直接問い合わせがある場合も十分ご注意くださいようお願い致します。

## 《お願い》

会員の皆様のご寄稿、ご意見及びご感想などは是非お寄せ下さい。また、会報で取り上げてみたいテーマ、企画等アイデアがございましたらご一報下さい。お待ちしております。

## お知らせ

### 第40回

## 愛媛大学医学部同窓会通常総会

次回通常総会の開催予定をお知らせします。日程が8月第1土曜日に変更となりました。特別講演会も予定しております。詳細につきましては、HPに掲載予定です。万障お繰り合わせの上、ふるってご出席下さいますようお願い申し上げます。

記

日時：2024年8月3日(土) 16時～  
場所：松山市内を計画中(Web視聴可能)  
議題：事業報告及び会計報告、予算の承認、その他

## 連絡先

〒791-0295 愛媛県東温市志津川

愛媛大学医学部同窓会事務局

TEL：089-960-5989

(受付 平日10時～15時)

FAX：089-960-5989

E-mail：eusmdoso@m.ehime-u.ac.jp

H P：http://www.m.ehime-u.ac.jp/dosokai/igaku/

